

カンボジア訪問 感想

セカンドハンド・ユース

原 雄一朗

はじめに、私たちにカンボジア訪問をする機会を与えてくださった皆さんに感謝の気持ちを伝えたいと思います。セカンドハンドに携わっている皆さんをはじめ、私たちの無事を祈ってくださった皆さん、ユースの皆さん、現地で私たちを最後までリードしてくださったセカンドハンド事務局の川内さんには大変お世話になりました。日本を出るのが今回が初めてであった私にとって、カンボジアで見るものすべてが新鮮に感じ、いろんな気づきを得られたかけがえのない時間でした。日本の生活は世界基準で見ると、決して当たり前ではない。そのことを身に染みて感じました。カンボジアを川内さん、片山君と私の三人で訪れ、本物のカンボジアを体験できたことはこれから私の人生において、大切な財産になると思います。

私がセカンドハンド・ユースの活動に興味を持ったのは、純粋に「面白そうな活動をしているな」と思ったことがきっかけでした。大学に入学するまでは「国際協力」という単語は知っていたけれど、どういうことをしているのか全く知りませんでした。「国際ってつくづらいだから、たいそうなことをしているんじゃないかな」と初めは勝手なイメージを作っていました。しかし、実際に私たちがする活動は地道な作業がほとんど。イメージとは正反対でした。

だけれど、「地道な作業の積み重ねが国際協力につながっているんだ」と国際協力に携わっている人は皆、口をそろえて同じことを言う。その言葉を聞いて「地道な作業がどういうことにつながっているんだろう」という疑問を持っていました。その疑問を晴らしてくれたのが今回のカンボジア訪問でした。

カンボジアに行き実際にユースが支援している学生に会いに、プノンペン市内のセンソック地区にある NGO 「マリノール」に行きました。そこでは学生たちが私たちの訪問を温かく迎え入れてくれました。到着した当初は、どんな学生がいるのだろうとドキドキしていました。学生たちとボール遊びをしたり、日本の食べ物をみんなで作ろうということで、白玉団子とぜんざいを作りました。みんなで作ってできたものは非常においしかったです。その後、「世界に一つだけの花」を歌ったり、クメールダンスを踊ったりと、ほんとに楽しい時間を過ごしました。その中で気づいたことがあります。話す言葉や住んでいる国は違うけれど、交流した学生たちとは考えていることが似ているし、中身は私たちと何ら変わらないじゃないかということです。カンボジアに来る前は、支援を必要としているだけあって、毎日、苦しい生活を強いられているのではと想像を抱いていました。確かに、私たちが知る以上に、見えないところで、苦しい思いをしている学生もいるかもしれない。しかし、学生との交流の中で、ほんとに無邪気な笑顔をたくさん見ました。私たち同様、こ

の学生たちにも未来があります。その中できちんと学校に通って、正しい教育を受けるということは非常に重要なことです。私たちにとっても同じことが言えると思います。私たちが日本で行っている、募金や地道な活動がカンボジアの学生たちの未来につながっている。そう考えると、地道な活動が国際協力につながっているという理由がわかつてきたよう思います。

奨学生と交流する他、セカンドハンドが支援をしている、孤児院や、学校建設予定地である小学校でも子供たちと触れ合える機会がありました。様々な理由で親元を離れなくてはならない子供たち、トタン屋根と木の板だけの校舎に通う子供たち。いろんな環境で生活している子供たちに出会いました。直に子供たちと触れ合って分かったことは、子供の無邪気さと笑顔は日本での子供たちと何ら変わらないということ。

ポルポト時代に大量虐殺が行われたキリングフィールドやトゥールス伦にも行き、人間がするとは思えない残虐な行為がなされた跡地を見ました。殺された人も、殺した人も、お母さんのお腹から生まれてきた同じ人間です。しかし、人間は過ちを犯してしまう生き物なんだなと感じました。

カンボジアから日本に帰ってきて、行く前とでは、少し物事を別の角度から見ることができるようになったのではないかと思います。日本で当たり前のことが、日本を飛び出せば決して当たり前ではない。また、住んでいる国や話す言語の枠組みを外すと、人の本質はあまり変わらない。当たり前だけど、当たり前のことに気づけたことが要因だと思います。国際協力とは国境や言葉という枠組みを超えて、お互いに同じ人間として、助けを必要としている人に手を差し伸べてあげることではないかと今の私は考えます。私自身、これからも生きていくうえで予期せぬことや色んなことが待っていると思います。今回カンボジア訪問で得たことを肥やしにしながら、これから自分に活かしていきたいと思います。